

サーキット・ライダー 2002年 2月号

苦難節を迎えて

主は言われる。「今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく、お前たちの心を引き裂け。」あなたたちの神、主に立ち帰れ。主は恵みに満ち、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみに富み、くだした災いを悔いられるからだ。

ヨエル 2：12－13.

今年は復活祭が3月31日と非常に早く、その為、例年よりも早くレント＝苦難節を迎えます。教会暦では夏休みの時期に次いで、このクリスマス後から苦難節までの時期は、ちょうど極寒の真冬でもあり、ゆっくりとしているのですが、今年は休む間もなくレントになりました。苦難節は復活祭前の、日曜日を除く40日の期間で、イエスの苦難、十字架を偲び、私達も身を引き締め、イエスの苦難は我が為と感謝し、少しでもその苦難を覚えようというものです。人によってはこの時期、断食をしたり、好きな物、例えば酒肴品やコーヒー、ケーキなどの嗜好品を断ったり、肉を食べなかったり、趣味を止めたり、特別に何か、早朝祈祷とかメデイテーションしたりします。

この習慣は日本ではあまりないようですが、アメリカではカトリックのみならずプロテスタントの諸教会も守っており、非常によい事だと例年思います。40はユダヤ教では苦難の数時で、ノアの箱舟の大雨が40日40夜降り続き、モーセとイスラエルの民がエジプトを脱出してから40年間荒野をさまよい、預言者エリヤがイゼベラ女王に命を狙われた時、40日40夜野山を逃げました。イエスも伝道の初めに40日40夜荒野をさまよい、断食しサタンの誘惑に遭います。40日(年)は苦難の数ですが、実は同時に、人々の信仰を試し、神に出逢い、神の御心を知る上で重要な数でもあります。

昨年の9月11日以降、私達の生活は表面的には変化が見られなくても、精神的、靈的には実に大きく変わりました。これまでアメリカが頼っていた物、力による繁栄が刹那的繁栄であったことに多くの人が気づきました。それらの人々はより精神的なものを求めてさまよったり、やはり元の生活に戻ってしまったりとその後は様々ですが、人生が大きく変えられて方がたくさんいます。私自身も9月11日の被害者の方々と関り、苦難を少しでも共にしようと祈った時、色々考えさせられました。そして導かれた答えは、教育伝道にもっと関るということ。大学時代にそのまま美術の道に進むかどうか迷っていた頃(御存知ない方も多いと思いますが、私は元々ニューヨークの美大で学んでいました。その頃)、教会キャンプ、キリスト教教育と出会い、教育伝道に携わるべく召命(招命＝神の呼び)を受けた時の思いが再び、昨年来の苦難の時期に強められ、学校に戻る決心をしました。勿論、牧師として働きながらですが。

人の心に蔓延(はびこ)る悪、人を傷つけても構わないという自己中心の罪に対して、どうやったら神の赦し、イエスの苦難、十字架をより多くの人々に伝える事が出切るかという問いを考えた時、牧師として、一信徒として伝道するのは勿論ですが、伝道の方法でもっとも自分にふさわしいというか、自分に与えられた伝道は教育に関ることだという結論、確信に再度達しました。賢い人は苦難を経験しなくてもちゃんと自分の道を見出し、歩めるのでしょうけれども、私のような愚鈍な者には、何かしら大きな変化を経験して、それに取り組む時間が必要なようです。皆さんはいかがでしょう。

冒頭の引用は旧約聖書のヨエル書からのものです。ヨエルは紀元前400年頃の人物です。その頃、また、その少し前のイスラエルはバビロニアに滅ぼされ、紀元前587～586年頃、人々は奴隷としてバビロニアに連れ去られました。50年後にペルシャのキュロス王がバビロニアを制圧し、ユダヤ人を解放し、荒れ果てた祖国に戻ってきました。しかしそのあまりの荒れ果てた祖国の地を見た時、また40年以上奴隷だったこともありユダヤ人の心も荒廃して信仰を失いかけていました。そんな時代に、神の怒り、裁きそして赦しを説いたのがこのヨエルです。

「今こそ、心からわたしに立ち帰れ、断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなくお前たちの心を引き裂け。」旧約の時代、またイエスの時代もユダヤ人は悲しみや苦難に遭うと自分が着ている衣をその場で裂いて悲しみやショックの感情表現をしましたが、神が必要としているのはそのような、ポーズ(見せ掛けのもの)ではなく、砕かれた心、神の前に身を低くして臨む姿勢であるとヨエルは語っています。

この苦難節、何かを断つという形だけでなく、心から神の前にひれ伏し、イエスの苦難を偲び、今苦しみの中にある方達と共に歩みたいものです。また今現在苦しみの中にある方には主の慰めが与えられますようお祈りいたします。